

水産の窓

サバ類の漁況と秋漁の予測

5 - No. 15
令和5年9月29日
茨城県水産試験場

1. 北部まき網サバ類水揚量の推移と資源状況

北部まき網によるサバ類水揚量は、加入尾数が極めて多かった H25 年以降、30 万トン程度まで増加しましたが、H29 年からは減少傾向となっています。特に R4 年の水揚量は 5.8 万トン（前年の 40%）と記録的な不漁となりました（図 1、棒グラフ）。

一方で、マサバの資源加入は、H25 年以降比較的良好に推移しており（図 1、折れ線グラフ）、資源状況は高い水準と評価されています。

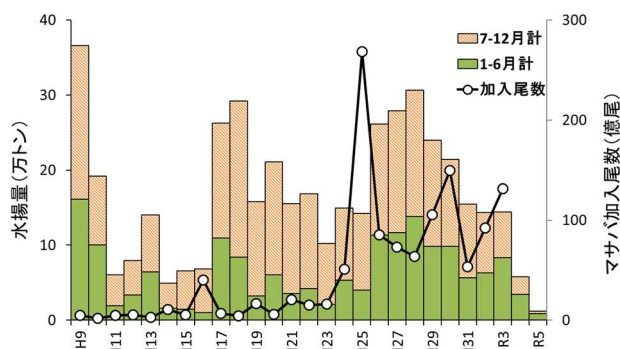


図1 北部まき網サバ類水揚量とマサバ資源加入尾数（令和5年水揚量は8月分まで）

2. 昨年からの不漁要因

資源量が多いにもかかわらず、なぜサバ類が獲れないのでしょうか。水産研究・教育機構によるとサバ類の漁場形成が不調となっている要因として、以下のようなマサバの南下回遊期における海洋環境の変化が推定されています（図 2）。

- ① 秋季から冬季にかけてのマサバの南下回遊期において、親潮が弱勢化し、三陸沿岸への張り出しが弱くなった結果、マサバの南下回遊経路が沖合化した可能性がある。
- ② さらに、黒潮続流が沿岸寄りかつ北向きに変化したことにより、日本近海の漁場における水温低下が阻害され、漁場への回遊時期の遅れや漁期の短期化が発生している。

上記要因により、サバ類を漁獲主対象とするまき網で漁獲されにくい状態にあると推定されています。

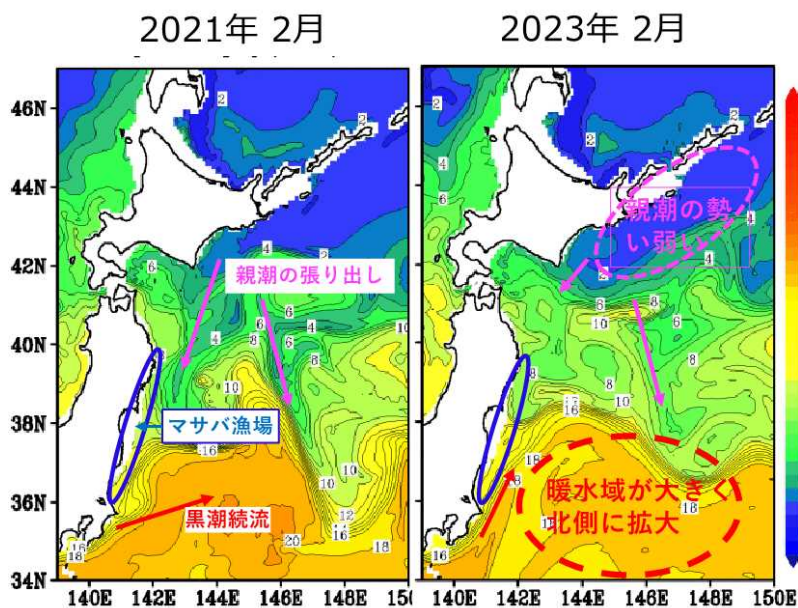


図2注：サバ類の漁獲が多かった2021年2月（図2左）、不漁である2023年2月（図2右）を比較すると、①図2左では親潮の三陸沿岸への張り出しに沿ってサバの群れが南下回遊するが、図2左では親潮の三陸への張り出しが弱く、サバの分布が沖合化した可能性がある。また、②図2左では黒潮続流が鹿島灘付近から沖合へ流れているが、図2右では黒潮続流が沿岸寄りに流れることで漁場の水温が下がらず、回遊時期の遅れや漁期が短くなるなど、漁獲されにくい状態となった可能性がある。

図2 2021年、2023年2月1日の水温（水深100m）FRA-ROMS IIにより作成「最近のマサバ（太平洋）の資源の状況及び不漁の要因について」（令和5年4月21日、水産研究・教育機構発表資料）より引用

なお、今年9月下旬現在においても、犬吠埼以北の北部太平洋海域では親潮の弱勢化と黒潮続流の北偏傾向による高水温が継続しており、北部まき網による今年1～8月のサバ類水揚量は1.1万トンで、前年同期（3.5万トン）を大きく下回っています。

3. 秋漁の漁況予測

①水揚量

北部まき網による1～6月のサバ類水揚量と9～12月のサバ類水揚量の間には正の関係があります（図3）。今年の1～6月の水揚量は0.9万トンと極めて少ないため、9～12月の水揚量も少ないと見込まれます。

また、上述のとおり昨年以降の海況はサバの漁場形成に不適な状況と考えられており、現在の海況が続くと水揚量は低調であった前年並と予測されます。

②漁期

H26年頃からサバ類の秋漁の漁期に遅れがみられています。北部まき網による9～12月の秋漁におけるサバ類の漁獲状況を整理したところ、秋漁が本格化した日（初漁期：9～12月の累計水揚量の20%を達成した日と定義）はゴマサバ資源量が多いと早く、マサバ資源量が多いと遅くなることが明らかとなっています（図4）。

この関係から推定すると、秋漁の本格化は11月中旬以降となる見通しです。

③魚体

秋漁では産卵準備のための南下回遊群が主な漁獲対象となり、魚体についてはマサバ体長25～36cm（体重160～550g、3歳以上）を主体に、18～32cm（50～360g、1歳魚、2歳魚）も漁獲されると考えられます。

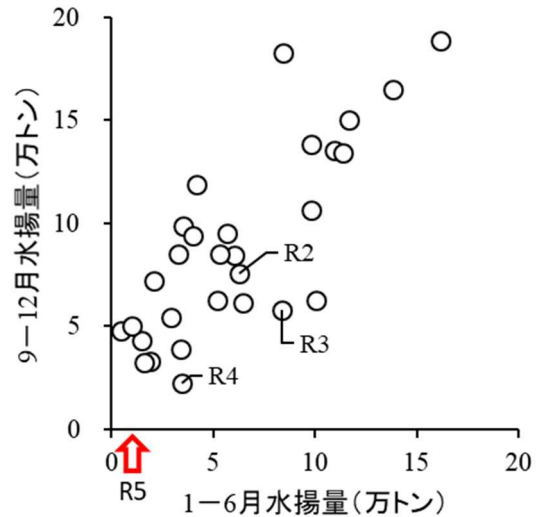


図3 北部まき網1～6月サバ類水揚量と9～12月サバ類水揚量の関係

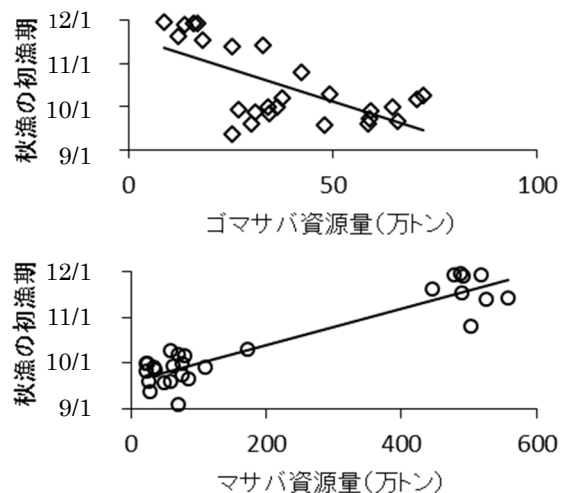


図4 秋漁の初漁期とゴマサバ資源量（上段）、マサバ資源量（下段）の関係

☆秋漁予報のまとめ

- ・親潮の勢力が弱く、黒潮続流が三陸沖まで北偏している現在の海況が続くと、水揚量は低調であった前年並
- ・漁獲がまとまるのは11月中旬以降
- ・体長25～36cm（体重160～550g、3歳以上）を主体に18～32cm（50～360g、1歳魚、2歳魚）も漁獲される

（回遊性資源部 荒井）